

色とあそぶ

植田 有子

ある日。……今は楽しい給食の一時である外は初冬には珍らしい春のような陽光がきらきらと輝いている。私は濃厚な何となくサテンのような重みのあるしぼりたてのミルクを片隅より余念なく配っている。子どもたちは遊びに満足したあとのほぐれたような顔をして、にこにここと私のミルクを注ぐ手許をじつと見ている。突如Sが叫んだ「やあ！ せんせいミルク見てみい！ きれいやおいしいで…プリンみたいや！」（言葉づかいはいささか乱暴である。）
「どっこいどっこい」「ほんと！」「あっ僕ともや！ Kちゃんのエプロンも顔もや！ 映画みたいや……」一大発見と共に子ども

達は異様なまでの興奮に包まれてしまった。「せんせい！ あれや、あれや！」子ども達は色源を求めて高い窓を指さす。ほんとにあれだ！ 私もあまりの美しさにじつと回転窓を見あげた。ステンドグラスのように張りつめたセロファンを通して洋菓子のような甘い感触が、部屋一杯に流れている。やはり幼児は美しい色が好きなんだ。しらすしらすの色彩生活を求めている。私はそつと胸に思う。苦勞のしがいがあつたと……。あんなに子どもが喜んでくれるのだから……。毎日子どもと共に山のように楽しくちぎったいろいろのセロファン、子どもたちが帰ったあと高い回転窓へ一倍冷たく感じるセロファン糊で次々と愉快に構成していった私たち……。此の古い鉄筋の何となく冷たい暗い建物も子どもと共に暖かく明るくなるよう工夫していこう……。と、いろいろのことを考える。「今年の子供の色彩生活を強調しよう」とみんなで話合つて「色とあそぶ」という難解な主題のもとに動きだした。それからは殊更に保育室から玩具へとあらゆるものに子ども

と共に改造を試みていった。子どもの協力ももの凄いなものだった。

そもそも私が幼児画に感激して興味をもちはじめたのは数年前……。世を挙げてピカシズムに傾倒しようとしている頃であった。その頃私は幼児画のすばらしい抽象化に大喜びしていた。

たまたま大阪大丸で第一回の幼児画展が催された。私は未だ、幼児画は遊びであり子どもの心をのぞく窓であるということを知っていなかった。自分の気のすむままに絵を見て、すばらしくピカシズムを多分に考慮した抽象化のたくましい作品を十枚選んで出品した。それは当時まだまだ概念的な絵が殆んどの中で、ほほえましさを誘つて見事に全部入賞した。私はピカシズムを他より一早く考えた為だと思つてひとり得意になつていた。あとで審査の先生方が幼児の発達段階に応じた伸びのびした子どもらしい作品として選んで下さったことを知り、ピカシズムと幼児画の偶然の一致に冷汗を流した思い出は今考えても恥しくなる。それから私は人間が誕生し正常な成長

をするならば、誰でもこのすばらしい幼児画の時代を経る筈であることを知って、この純粹な時代をなくさないよう注意し、大事にしてやりたいといういろいろのことを試み始めた。まずある年は、

○子どもたちが先生からただ一枚の紙を渡されて緊張して描いたものでは、のびのびとした絵も出来ないだろうし、又子どもが失敗することを恐れて、いつも描いている概念的な絵ばかり描くかもしれないと考えて、希望するだけ紙を与えた事がある。(然しこの方法は、不経済でもあるし、創造性が生れるよりも、たくさん描くことに競争心をもち、三枚目位になると、かえっていつも描いている船、花などが続出し悲観した。)

○次の年は、入園当初から既に概念的な絵ばかり描く子どもが、相当数いることを考えて全園児一様に、遊びとして最初、アブストラクト様のものを描かせた。(勿論、話しかけもよくして「ちんちん電車が走っていますよ」と画面一面に線を描き、「道端にれんげ島がありました」等

と色々の色でぬりつぶして「遠くから見ると、何に見えるかしら……」。『あひるさん』というようにゲームとして取扱ったり、随分楽しく遊び、線ものびのびと美しく画面も一杯に使えるようになった頃に、普通の自分の意図する描画生活に入らせたのであるが、これは、一見とても色を美しく使い画面をよくこなし、成功したように思ったが、第二保育期の終り頃になっても、又しても、アブストラクト様のものばかり描く子どもが出来てアブストラクトの概念化というか、旨く描かそうとして極端すぎたと思っている。)

○その翌年は、画用紙の使用数を一日一枚と定め、描いた子ども自身がいろいろの項目により反省する。(この項目は、全部で十五項目あるが、その中、幼児向のものだけ五つ選んで、自由に描いた子どもが保育者と共に、この項目によって反省するわけである。この方法は、幼児数が多くて繁雑な上に、まだ一人で反省する能力を持たない幼児にとつては徹底せ

ず、お母さん方に協力を求めたこともあるが思わしくいかなかった。その五項目を念のためにあげてみると、①大きく描けたか。②賑やかに描いたか、③力を入れて濃く描いたか ④人のまねをしなかつたか、⑤紙の縦横を自分で決めたか) 以上いろいろのことから、描画生活をスムーズにさせるためには、入園当初は、フインガー・ペンティングをやつて、楽しく遊び、のびのびとした力強さを養うと共にあまり作意的な事は考えずに、自由に絵を楽しませ、その出来たものに、発達段階を考えて、よく賞讃し、前述の項目の中、①②、③の三つの中、子どもと共に反省する機会をもっている。これで私は納得してうまくいきそうに思うのに、なかなか理想と現実には思うように一致しない現状である。

お互いに幼児面の取扱いのむずかしさを十二分に思い知らされている。概念的な絵はいけないと云つても、その「概念的」の評価のむずかしさ……、家とチューリップを描いていても必ずしも、概念的でない場合もあり、普通に描いているものを、奇抜

な方法によって、無理に流行のモダンアールに随順しようとしているのではないかと、自己反省する気まずさ……。

一昨年の五月だったが、全国図工大会で幼稚園の絵画製作における一般目標が、
「人間形成」「創造力の成長」「感覚調和」等、大きく叫ばれていたが、その折、幼児の将来の生活芸術化を思い、それは造形と考えてただ描くことだけを思わないで、もつと根本的な環境による色彩生活を考えようではないかと話し合った。そうしたいくつかのなやみを経て、今までの幼児画の見方に対する大人達の罪を思い、とうとう一大決心をして、「色と遊ぶ」に至ったのである。これも最上の方法であるとは思わないし、又つきあたる事と思うが先ず手始めに、冷たい保育室を何とかして明るい感じにしようかと相談し、そして出来たのがステンドグラス(?)である。ガラスにいろいろのセロファンをべたべた貼り、その上にセロファン糊をもう一度流しておさえておくだけの至極簡単なことで前述のような今更のように色の発見というか感激的シー

ンを得て一同大よろこびしたのである。その後、子どもたちが、どんなに動きだすか見てみると、「お菓子の家」の劇あそびをするといつては、その美しいところへ積木で家を建てる。写真やごっこをしてもすぐそこへ立つ。まだまだどんなに幼児がそれを活用し、色彩を自分のものにしていくか興味をもつて記録しつつあるわけであるがとにかく大きな収穫は、部屋が暖かく感じられるようになった事である。異った色のセロファンを貼ったので、透明な所へ光線を受けてそれぞれの色彩が補色しあい残像として紫がかつたピンクの部屋として頭にくりいつも軟かいふんいきをかもし出している。その他、砂をたくさんボスターカラーで染めた、丁度クリスマスであり、デコレーションケーキを、砂場に大きくレクーフしたが、何の変態もない砂山も、一寸した色砂で、美味そうになり子どもの喜びも大きくさすがの日頃の腕白も、一週間位自ら番人になって食わずに待っていた。この染め砂は一雨で洗われたので砂場も汚れず便利であった。

又秋にどんぐりをたくさん拾って来たが、半分だけ、赤と黄と、灰色にラッカーで着色し子供の玩具箱に黙って入れておくと、着色したどんぐりばかりままごとに使っている。子どもの色に対する感激は大人よりも鋭敏で、どんぐりに色が着いていると、並べるのにも、自然に、互いがいに配色している。いつか同じことで驚いたことがある。○ちゃんがいつも絵を描く時は、茶と黄のコンビ、Hちゃんは水色とピンク、始め気がつかずにいたが、いつもいつも同じ好み感じの色調なので、よく考えていると、どちらもお母さんの服装から、室内調度品の好みか、その色で統一されていたのである。

アルシュラーの色彩心理のように、絵からのぞかれる子どもの心理も大切であり、又逆に、いろいろの環境から与える色彩による心理も重大であり、部屋の色彩によって、心理状態を安定にしたり、不安定にいらだたせたり、情熱をかき立てたり、又食物にしても食欲が増進したり、減退したり色彩生活の人間に及ぼす影響は大きいと思

う。大担に、「色」にとりくんでいくことによって、今後の子どもの生活に、どんな動きが見られるか、まだ未定であるが、全員協力して、幼児の将来の豊かな色彩生活の一助になりたいと願っている。

(大阪学芸大学付属幼稚園)

私の園の研究

中谷 久子

「私の園の研究」といって、特別発表するような変わった事は何もして居ないが、日々の生活の中で具体的な問題をとらえては研究を進めている。尤も平凡な研究かも知れないが、一日一日を研究の場とし、瞬間に起る出来事一つ一つをその研究の対象として楽しい張合のある生活を送っている。

兎角、私共が心を合わせて努力している

事は、自己改造の問題である。精神的な解放である。

「のびのびとした子供を育てる」

これが我が園のモットーであるが、それには先ず幼児一人一人の精神的な解放をすることが、何よりも先決問題となるであろう。早く幼児達の余分な緊張感を去りいろんなコンプレックスを無くして、自分の思うことが素直に語るせよう。感じたことがすぐに表現出来るようにすることである。

それには先ず先生自身の精神を解放すること、これがその前提となるべきである。

先生自身がかたい、気持でどうして幼児をのびのびとさせることが出来よう。教師と言う意識を持ち過ぎると、どうしても指導が命令的、指示的になり、幼児の自発活動を妨げる結果となる。それよりも教師がもっと人間的になり教師と言う観念を捨てて幼児のよりよき理解者、幼児から言えばよりよき遊び友達と言う感じになること。これがすべての指導の根本となる問題だと思おうのである。

幼児と先生にこの関係がうまく成立した

ならば、すべての指導は非常に容易になるのである。

例えば、

1、環境さえ適当に整えて置くと、遊びは積極的、能動的になり発展性をもつてくる。

2、自己をよく現わすので個性がしっかり掴めるからガイダンスが仕易い。

3、表現活動がスムーズになる。つまり絵もよくなり、リズムに於ける自由表現も苦勞なく出来はじめる。

私共は入園当初よりこのことを一生懸命導いて来た。一人の幼児をおろそかにすることなく、早く心につながりをもつてやること、

そうするとはじめは黙って遊にも参加せず、唯傍観していた幼児も、現在では喜々として活動をはじめ、集団の前で大きな声で歌もうたえる迄に精神が解放されている。

こうして一人一人が安定感をもち、自由に活動をはじめると生活は活き活きとし、私共はうっかりすることが出来なくなるの